

平新報

第一線に立つ前

主幹 山野邊庄吉

▲是の章を先づ大正六年四月十三日午前四時幽明界を異にした故父俗名徳次徳照院浄譽道清居士の靈に捧げ、母ヘラカラ、生里の人々幼き時よりの畏友辯護士 山野邊義政氏小學校児童時代の恩師現玉川村収入役鈴木稻義氏、現本宮小學校長、篠山謙氏、中學校生徒時代の恩師時の校長桐谷文文氏、修身科遠藤平太氏、組主任山崎宣吉氏、活社會に入つて飯田一二氏、渡部後新聞生活に入つて群山日報社事務理事松岡琢郎氏、群山辯護士引地寅治郎氏、元警備青年統一會關係人谷位、磐城中學、六回卒業二八會々友各位其他知己諸彦に呈し其の御批判と再び理解のある御指導を仰ぐ

▲近代の思想家アルドルフ・アイケンは「人生の最大幸福とは自己が最も愛好する事業に向つて全勢力を傾注し得る事が出来る境涯なり」と云つて居る。實に至言であると思ふ。私の過ぎし生活の一部

▲所謂他力主義の「自己局外者の恩恵的救済」に依頼しようとしたのであつた何といふ浅ましい事であつたらう、他人の恵んで呉れる衣裳に包まれて、腰を楽まうとするのは何といふ御自出度見でであつたらう、然し過去は過去として私は失敗に終つたか、知りぬが、私は再び修業の道路として、何等急に介する事はない。又過去を問はれたならば相當の辯解とそれの材料は有る、それを承解するの義務を感じるのであるが今はそれを爲すを躊躇する、即ち疑ふものに取りては百の辯解も要するに疑を益々深からしむるのみであるからである

▲人は觀る人の目によつて顯るものである。その批判はその人の自由任に任したい、馬鹿に罵るものは勝手に罵らしめよ、狂人と嘲る者は自由に嘲はしめよ、私は巴の信する所に向つて進んでいけるものである。ある、その新芽を折らす

▲西哲は「天下に何者を知り得るも自己のみは知り得ず」と天は汝を教ふ力は汝以外に與へずとは故に黒岩周六氏のイネルギズムに力設せる所である、佛が何故に王公生活をやめて、路頭の人となりしか、キリストは「人はパンのみに生くるにあらず」と叫びしか孔子は何が故に「道に生くる」と教へしか私は小さいながら人間は物質の多少によりて人生の幸不幸を感ずるものでないと思ふ

▲韓退之曰く「物その物を得ざれば則ち鳴る」と平であつて平ならざるは當地方目下の思想

▲六年振りで歸省して、早や五ヶ月有半地方事情の一斑を知り得た、敵あれば味方ありと云ふ惜まぬ小僧としては進みたくはないが買られた喧嘩は買はずはなるまい、生れた以上は生なければならぬ、死に到達する迄、自殺せぬ限り他に殺されずは居らぬ、然し本紙は嗚々の聲をあげた許りで、牙を出した新芽である、その新芽を折らす

泉源 松栢館

電話五番

平町 平新報社

山野邊義政

銘酒

長瀬元治郎

五半 郎

石城郡 島田

▲第一線に立つたんとすに、秋、先哲の言葉を借り、一言以つて筆者今日迄育ち得たる恩を謝し、大方知己の批判と再び理解のある指導を仰ぎ、第二線に題す事然り矣

謝告

左の諸氏より本紙發刊祝として各金一封を寄られたりした紙上を以つて謝意を表します

平新報社

平一丁目 飯田一二 殿

玉川村 大原 渡 殿

磐城中等學校十六回卒業二八會友岩手縣宮古町下閉伊 稅務 署 山野邊久利 殿

同會友東京鐵道省

長瀬元治郎 殿

平町紺屋町八藤沼病院長 藤沼平次郎 殿

平町紺屋町住吉屋本店 青天目増藏 殿

平町紺屋町 炭屋 旅 館 殿

磐崎村德待寺 佐竹智明 殿

拜啓貴社發刊號御惠賜被下有難く拜願仕り候、小生をして忌憚なく言はしむれば大兄の交換甚だ洗練を加へ些少のゆるみな筆致に敬服仕り候地方發達の爲の折角發展を祈り上げ候 敬具

朝鮮里東拓支店 金子龍男 殿

議院貴紙贈呈奉謝候「平新報」の發刊を祝し益々將來の御隆盛を祈申候年未筆責下の健在を祈上候 敬具

裡里も昨今の築家屋ボク（各所に出現數年後に相當發展可致東洋水利も設立認可可濟なれば人も入り込むべくと被存候

朝鮮山府 上妻喜久 殿

御手紙正に拜見仕り候全回貴廠の下幹にて新聞を御發刊なさる様相成候山邊の影にて大に喜び居り申候益々御奮闘御榮達あらん事を神かけて御祈り申上候

平新報發刊を祝す

朝鮮山府 檜田四拾九番地 郡山商業會議所會頭 樋口虎三 殿

電話一二四番

祝發刊 石城郡銀行組合

乞御諒解

本號より第一線に立つて豫定でしたが發行日が舊盆にかかりたるため印刷工場の休業、都合上本月五日付は休刊しました創業勿々の事御諒解を乞ふ

訂正 本紙前號一面記載井上貞治郎氏の分頁次郎とありは誤植につき訂正す

平新報社

△支社設置▽

本社事務所の形式を解き本社を平町田町一九を本社とし大正十四年九月五日より玉川村岩出字向二十八番地に玉川支社を設け、玉川村、小名濱町、鹿島村、江名町、泉村、磐崎村、各方面の社務一切の事務を取り扱ふ事となりました、錦地方面各位何分よろしく御願ひします

大正十四年九月十五日

平町田町一九

平新報社

△急告△

一、本社には社務立當時より社員一名もなく但し久濱町新築林街へは本社社員として入社する事になつて居りましたが同人目下病氣のため静養中にて右は從來現在とも社務に關係して居りません

然るに某々二名連日本社社員と稱し平町は加納、郎氏其他、又は双葉郡長塚村有志を訪問して發刊援助を求めた形跡があります、右は本社と何等關係ありません

一、將來社員入社折は前以つて社告致す事になつて居りますから豫め御諒解を望みます

大正十四年九月十五日

山野邊庄吉 平新報社

玉川地方支社

部長 橋本佐多壽

理事 村上龜之助

支社長は當分のうち主幹兼筆し理事は支社の會計事務を取扱ふ

凡倉 浮草生活 山莊 (二)

磐城青年統一會... いはらきは其當時高野氏... 大分出で居つた川崎氏は自由青年會なるものがあつた...

祝平新報刊

平町	
會議員	
一丁目	藤原 貞衛
二丁目	渡邊 貫一
三丁目	植原 眞吾
四丁目	丹野 繁三郎
五丁目	大谷 久藏
六丁目	阿部 雅次郎
七丁目	井上 茂作
八丁目	星野 清吉
九丁目	荒川 漢次郎
十丁目	森本 盛一
十一丁目	野崎 滿藏
十二丁目	岩本 重雄
十三丁目	大森 勇
十四丁目	萩原 義雄
十五丁目	吉田 定太郎
十六丁目	諸橋 國松
十七丁目	松崎 菊三郎
十八丁目	佐藤 岩次郎
十九丁目	遠藤 林松
二十丁目	佐藤 芳松
二十一丁目	加納 五郎
二十二丁目	會川 卯三郎
二十三丁目	阿部 政右工門
二十四丁目	阿部 太平
二十五丁目	吉田 五平
二十六丁目	青沼 録太郎
二十七丁目	佐々木 龍若
二十八丁目	櫻 井 清
二十九丁目	花澤 久一郎
三十丁目	永山 義太郎

玉川村	金成區長 宮内熊次郎
住吉 (不順)	齊藤 丈夫
橋本伊八郎	竹原 理助
柳井 卯重	竹原 銀次
鈴木金太郎	佐藤 久
柳井 竹治郎	佐藤 盛司
橋本 雄吉	南富岡
林城 (次第不順)	西丸馬之助
永井 庄平	齊藤 春吉
小泉 忠文	區長
永井 直良	
組防消	組頭 西丸 一
	副組頭 駒木根忠三
	小頭 馬目 吾行
	小頭 永井 業守

秋風來!

山田 綠 雨

秋風來! 秋風來!! 詩人こみあげ來つて「自然は成は歌よ。」「葉落ちて天下 遼 人生は短かじ」と叫ぶの秋を知る」と。秋は浦淋ざるを得まい。

くく物のあはれを感ずるシ 奥の細道ふみわけて 秋風はふよりも湖落の秋を好む。秋は落して只管に「自然」は哲學的だ。宗教的だ。白銀の心だ。俳聖芭蕉の聖心。然と人生「問題」に就て、 吾情 徳も この秋だ。「文明と生活」問題に就て 秋風サツト面に吹き來れば一人しりやかに オロオロ 熱も 熱も おのづからを仰いで三更獨想一番す 冷頭冷心となり 透徹するにふさはじきはこの秋で たる清明の心となる。あらねばならぬ。碧空を仰 ナンデモ カンデモ秋に隠ぎ胸を披いて 自由の大氣を。ホントオに秋はいーを清酒の空氣を呼吸するも やがて前山も紅葉となりん亦秋だ。庭の柿も出來やう。栗も山試みに太平洋の怒濤連捲くから出て來るだらう。故山岸邊に佇み 天心の月に對の秋 自然の秋をしましめて 潮音に和して 口笛 吹はつて千里の長閑 萬里吹けば いはれ知れぬ哀感の波濤としやれやう。

平町書籍文具店

一丁目	飯田 商店
二丁目	清光堂 本店
四丁目	柴田 商店
才地小路	堀 魁 文堂
才地小路	清光堂 分店